

「守り」から「攻め」の生徒指導・教育相談を目指して

～私たち「TOYONファミリー（チーム学校）」のいじめ・不登校防止対策～

仙台市立東四郎丸小学校

校長 伏見 滋

I 主題設定の理由

文部科学省は「生徒指導提要の改定を踏まえたこれからの生徒指導の方向性」の中で、発達支持的生徒指導が全ての教育活動の基盤であり、チーム学校における生徒指導体制の構築が重要であると強調している。

本校は児童数247名、開校43年目を迎える学校である。児童は全体的に素直で人懐っこく可愛らしい。一方で様々な配慮を要する家庭環境に置かれている児童の割合が高く、日常的に不安や悩みを抱えて登校してくる児童も多い。自己有用感が低く、人間関係作りが苦手な傾向の児童も目立つ。いじめ・不登校に関する課題も多く、生徒指導上のトラブルも毎日のように発生しているのが現状である。教職員は日々、児童・保護者の対応に追われ、生徒指導上の重大事態が「いつ発生してもおかしくない」という危機感を持って業務にあたっている。

以上のことから、令和4年12月に改定された生徒指導提要の趣旨を踏まえながら、より本校の実態に合った「攻め」の生徒指導・教育相談体制を構築し、いじめ・不登校防止対策の充実を図ることが急務であると考へ本主題を設定した。

本研究の基本的考え方、実践の概要と得られた成果等についてここに紹介したい。

II 基本的考え方

(1) 「守り」から「攻め」の生徒指導・教育相談とは

「守り」の生徒指導・教育相談とは、主に課題が生じた後に即応的、継続的に行う、いわばリアクティブな生徒指導・教育相談と解釈する。「攻め」の生徒指導・教育相談とは課題が発生する前に常態的、先行的に行う、いわばプロアクティブな生徒指導・教育相談と解釈する。「守り」は生徒指導提要に示されている困難課題対応的生徒指導に分類され、課題や困難を抱える特定の児童が主な対象となる。同様に「攻め」は発達支持的生徒指導に分類され、特定の課題や困難を

想定しない全ての児童が対象となる。

本実践は「守り」の生徒指導・教育相談の取組を確実に実行しながら、①異年齢交流活動を核とした取組、②「チーム学校」としての取組、を「攻め」の生徒指導・教育相談を支える「2本柱」として定め、いじめ・不登校防止対策を推進していくものである。

(2) 「TOYONファミリー」とは

本校の「チーム学校における生徒指導体制」の総称。「東四（とうよん）ファミリー」と読む。教員はもとより、事務職員、技師、スクールカウンセラー等、本校全職員と保護者、学校ボランティア、地域関係者、学校運営協議会委員等が「ファミリー」のメンバーに含まれる。数年前から本校の学校づくりの合言葉である「よってたかって子供を育てる！（すべての大人ですべての児童を育てる！）」の精神を表現するときに用いられてきた。特に、いじめ・不登校防止対策は個々の教職員（担任）はもとより学校だけで行われるものではなく、「TOYONファミリー」全員が参画し「チーム」として取り組むべきであるという決意と思いが、その名称に込められている。「TOYONファミリー」の名称とその精神は保護者、地域に確実に浸透してきている。

(3) 異年齢交流活動とは

本校の異年齢交流活動とは、意図的に学年の枠を外して行う教育活動である。授業（各教科等）、特別活動はじめ学校生活全般で実施している。特に「きょうだい学年」での授業や活動を積極的に展開しており、本校の特色ある教育活動となっている。「きょうだい学年」とは1・6年、2・5年、3・4年の「ペア学年」の総称である。異年齢交流活動が児童の自己有用感を高め「相手意識」を育むことは、これまでの本校の研究から明らかになっており、「攻め」の生徒指導・教育相談においても最も重要な手立てとして位置付けている。本校は「令和3・4年度仙台市教育委員会自主公開校」に認定され、異年齢交流活動を核とした学校づ

くりについて、関係各位から御指導を賜りながら研究を深めてきた。令和5年度も自主公開校としての研究の成果を生かし、本校独自の異年齢交流活動指導計画「東四スタンダード」に沿って計画的に活動を展開している。

Ⅲ 「攻め」の生徒指導・教育相談を支える「2本柱」と中心となる実践

【柱1】異年齢交流活動を核とした取組

実践 i : 「きょうだい学年」での授業

実践 ii : 特別活動における取組

実践 iii : 中学校との連携

実践 iv : 指導計画「東四スタンダード」の活用

【柱2】「チーム学校」としての取組

実践 i : 「TOYONファミリー」の組織力強化

実践 ii : アセスメントの強化

実践 iii : 学校マネジメント機能の強化

Ⅳ 実践内容

「2本柱」の中心実践について、「攻め」の一手と、取組の概要、主な実践を紹介する。

【柱1】異年齢交流活動を核とした取組

【柱1-i】「きょうだい学年」での授業

「攻め」の一手! (柱1-i)

◇「きょうだい学年」での授業で相手意識(対話スキル)向上をねらう。

「きょうだい学年」での授業を積極的に展開した。「きょうだい学年」での授業で特にねらったことは、一人一人の発達段階に応じた相手意識(対話スキル)を向上させることである。相手意識(対話スキル)の低い児童は、いじめ・不登校問題に関するリスクが高い傾向にある。そこで、相手意識(対話スキル)を向上させるための「視点」を必ず設定して授業を実施するようにした。

授業検討会の持ち方も工夫した。授業検討を行う際は、ファシリテーターとグラフィッカーを検討会ごとに選出し、職員の主体性を重んじ、明るい雰囲気大切に、生徒指導・教育相談に関する話題も自由に議論できる検討会を目指した。

【主な実践】

①「1・6年(きょうだい学年)」の研究授業

教科領域: 総合的な学習の時間(6年生)

生活科(1年生)

概要: 話し合い活動をとおして相手意識(対話スキル)の向上をねらった。「1・6年ペア」を編成して活動を行ってきた取組について振り返りを行った。1年生は6年生への「お返し」の内容について話し合った。6年生は1年生のお世話の仕方をテーマに話し合い活動を行った。

②「3・4年(きょうだい学年)」の研究授業

教科領域: 総合的な学習の時間(4年生)

学級活動(3年生)

概要: 「学年部マッチ」(ゲーム大会)で交流しながら相手意識(対話スキル)の向上をねらった。本時では4年生が「企画」し、3年生が「招待」される形で行った。4年生は3年生を楽しませるためのアイデアを真剣に考え、3年生は4年生に手紙を渡し「お礼の気持ち」を表すことができた。

③「2・5年(きょうだい学年)」の研究授業

教科領域: 総合的な学習の時間(5年生)

算数科(2年生)

概要: 異年齢交流活動で初めて、5年生(上級生)が2年生(下級生)に算数の学習(時計の時刻を求める問題)を教える活動に挑戦した。「教える」「教えてもらう」関係の中で相手意識(対話スキル)の向上を図った。

【柱1-ii】特別活動における取組

「攻め」の一手! (柱1-ii)

◇「6年生(上級生)が手本」の徹底

異年齢交流活動を取り入れた学校行事、児童会活動を計画的に展開した。すべての活動をとおして「6年生(上級生)が手本」という風土の定着・醸成をねらった。また「人のために頑張る場面」を活動ごとに必ず設定した。児童の自己有用感を高める「仕掛け」を意図的・継続的に行っていくことがいじめ・不登校防止対策に有効であるという考えに基づいている。

【主な実践】

①運動会では「きょうだい学年」で練習に取り組んだ。表現種目を互いに見合いながら交流し、上級生への尊敬の念を育んだ。

②美化活動(勤労生産奉仕的行事)では「きょうだい学年」で協力しながら地域清掃等の活動に取り組んだ。

③1年生は入学式の翌日から6年生と「ペア」を組み、小学校生活に馴染ませる仕組みを構築した。

【柱1-iii】中学校との連携

「攻め」の一手！(柱1 - iii)

◇中学生への「憧れ」を抱かせる場を設定する。

本校は卒業生の多くが仙台市立袋原中学校へ進学する。小中一貫した生徒指導を目的として袋原中学校との校種を越えた異年齢交流活動を推進している。小学生は「中学生への憧れと感謝」の感情を抱き、中学生は「後輩たちのために頑張る」という意識を高めることをねらっている。生徒指導上、小・中学生の双方にとって「win・win」の関係で活動が展開されている。

【主な実践】

- ①夏休み中に実施している「勉強会（東四塾）」において中学生が「先生」として児童に学習のアドバイスを行っている。
- ②本校の校門付近で実施している「あいさつ運動」に中学生も参加し、児童に挨拶や声掛けを行う。年に10回程度実施している。
- ③陸上記録会の練習に中学生が「指導者」として参加し、児童の陸上競技のアドバイスを行う。例年8～9月に数日間実施している。

【柱1 - iv】指導計画「東四スタンダード」の活用

「攻め」の一手！(柱1 - iv)

◇どんどん朱書き（上書き）を重ねる。

「東四スタンダード」とは本校が独自に実践している異年齢交流活動の年間活動計画の総称である。学年ごとに、活動内容や留意点が示されている。約6年間をかけて作成し、令和4年度に一定の完成を見た。このことで本校の異年齢交流活動は完全に軌道に乗ったと言える。

【主な実践】

- ①児童や学級の実態に応じて、教職員が朱書き（上書き）しながら改善を重ねている。
- ②生徒指導・教育相談に生かせるよう、内容の更なる改善を図っている。

【柱2】「チーム学校」としての取組

【柱2 - i】「TOYONファミリー」の組織力強化

「攻め」の一手！(柱2 - i)

◇学校運営協議会を要とした組織への大胆な転換。

「チーム学校」での生徒指導の実現へ向けた「TOYONファミリー」の「組織図」は完成している。「攻

め」を掲げている本実践では「組織力」の更なる強化を目指した取組を行っている。

【主な取組】

- ①「学校運営協議会」を要とした組織への大胆な転換

本校の学校運営協議会は令和4年度に立ち上げたばかりであるが、いじめ・不登校防止対策について三者協働での取組の可能性と具体的手立てについて熟議を重ねている。将来的に本協議会が「TOYONファミリー」の要として機能すべきである。現在、大胆な組織転換を図っている。協議会委員は大学教員（元袋原中学校校長）や地域の若者（本校の卒業生）、地域NPO法人代表、地域関係者等のメンバー構成となっている。専門性の幅の広さと生徒指導への造詣の深さを重視した人選となっている。

- ②生徒指導対応力向上を目指したOJT

やや厳しい言い方だが若手教職員の割合が高い本校にあって、教職員一人一人のスキルアップが図られなければ、どんな立派な「組織図」があっても「組織力」は向上しない。教職員一人一人の生徒指導対応力、保護者対応能力向上を目的とした校内OJTを推進した。

- ③保護者、地域への広報、啓発活動の強化

本校のいじめ・不登校防止対策について、PTA総会や学校日より、本校ホームページ等で保護者・地域への啓発を積極的に行いながら、「TOYONファミリー」の一員であるという意識の向上を図っている。

【柱2 - ii】アセスメントの強化

「攻め」の一手！(柱2 - ii)

◇児童・保護者の「予兆」を絶対に見逃さず、スピード感を持って「次の一手」を講じる。

本実践におけるアセスメントの強化とは、生徒指導・教育相談における「具体的手立て」と「プランニング」について、職員間で常に「評価」し合い、最も有効な手立て（次の一手）を講じられるような体制を整えるということである。特に、いじめ・不登校に関する課題における対応は、「たった一言」「少しの遅れ」で深刻化を招くケースがあることから、個々の課題についてアセスメントを強化し、丁寧な対応を徹底して取り組んでいる。中でも、保護者対応に係るアセスメントは極めて重要である。児童本人以上に保護者対応のミスから「炎上」するケースがこれまでもあった。そこで、保護者と日頃から良好な関係を築き、保護者の情報を収集しながら、重大ないじめ・不登校問題に

進展してしまう前の「予兆」を見逃さないよう細心の注意を払い、「予兆」を絶対に放置しない体制を整えた。

【主な取組】

①アセスメントを生かしたケース会議の開催

「予兆」等が認められた場合、原則、その日のうちにケース会議を実施し、アセスメントを生かして「次の一手（具体的手立て）」を、いつ、誰が、どのようなアプローチで実施するのかを明確にするようにした。

②「よってたかってファイル」を生かす

「よってたかってファイル」とは、全職員がリアルタイムで生徒指導の現状を把握するためのいわば「生徒指導情報ファイル」である。職員室の決められた場所に常設してあり教育相談部長が管理している。

③「生徒指導打合せ」での情報共有

毎週火曜日に気になる児童・保護者について情報を共有するための「生徒指導打合せ」を実施している。

④「拡大ケース会議」の実施

「予兆」が重大であると判断した場合には、関係機関に協力を仰ぎ「拡大ケース会議」を速やかに招集している。東中田地区民生委員・児童委員協議会、太白区家庭健康課、仙台市教育委員会各課、仙台市児童相談所、仙台南警察署、仙台少年鑑別所等に出席を依頼し実施している。関係機関と学校とが「役割」と「プランニング」を共有することを目的としている。

【柱2 - iii】学校マネジメント機能の強化

「攻め」の一手！（柱2 - iii）

◇たとえミスをして「ドンマイ！」で許し合える「安心感」のある職場づくり！

「守り」から「攻め」への転換には、学校マネジメント機能の強化が不可欠である。校長のリーダーシップのもと「安心感のある職場」を目指した。

【主な取組】

①方向性とプライオリティーの明確化

本校が目指す「攻め」の生徒指導・教育相談の方向性とプライオリティーについて校長が常に具体的に示し、職員会議等で全職員に指示・伝達した。全職員が生徒指導・教育相談業務における「役割」や「優先順位」を明確にして業務に取り組めるような組織づくりを常に心掛けた。

②校務分掌の改善と適材適所の校内人事

校内に「教育相談部」を新たに設置した。生徒指導におけるマネジメントの一体化を目指し、「風通しよ

く」生徒指導情報を共有できる体制を整えた。また、職員の年齢や経験年数にとらわれず、教員の「持ち味」を發揮できるような適材適所の校内人事を行った。

③「安心感」を重視した職場づくり

「攻め」の生徒指導・教育相談の取組は教職員の肉体的、精神的負担が非常に大きい。全職員が安心して仕事ができる職場環境がなければ絶対に実現しない。「安心感」に満ちた職場づくりを目指した。互いに感謝し合うことができる空気感と、失敗を「ドンマイ」で許せる職場の雰囲気常を常に大切にした。

V 実践の成果

【柱1】異年齢交流活動を核とした取組について

- 不登校児童の数は減少している。全学級で「質の高い授業」が展開され、児童は瞳を輝かせて学習に取り組んでいる。いわゆる「学級崩壊」はここ数年起きていない。楽しい学級が児童の「居場所」となっている。
- 「悪口」によるいじめが大きく減少した。児童の相手意識（対話スキル）の向上が図られ「自分の言葉」で気持ちを表現できるようになった児童が増えた。「ウザイ」「ダルイ」といったマイナスの表現が減った。
- 重大ないじめ問題は発生していない。学校全体に安心・安全な風土が醸成された。「6年生（上級生）が手本」という意識が全児童に定着した。

【柱2】「チーム学校」としての取組について

- 組織力が強化された。学校運営協議会を要とした三者協働によるいじめ・不登校防止対策体制が整った。教職員個々の「生徒指導スキル」の向上も図られた。
- 課題の深刻化、長期化が防止された。「炎上案件」はなくなった。「攻め」の一手を全職員で共有し、実践したことが功を奏した。疲労感に怯まず「適時・速攻」で幾度も開催したケース会議は極めて効果的だった。
- 「いつも安心感のある職場」が本研究・実践の基盤であり原動力となっていた。教職員の笑顔が増えた。

VI おわりに ～研究の評価は「子供の姿」～

本研究の評価は「子供の姿」である。それは課題や困難を抱える特定の児童の変容やその数ではない。本校全児童の日常の姿と成長の様子が私たちの研究の評価である。「TOYONファミリー」は全員がそのことを共通認識している。本研究にゴール（完成）はない。今後も私たちは「TOYONファミリー」の一員としてのプライドと使命感を持って、子供たち一人一人に寄り添いながら、「安心・安全な学校（子供の居場所）」を作っていくことをここに誓い結びとしたい。